



## 学会発表のみならず論文執筆を

●  
**淵上寿雄** Toshio FUCHIGAMI

東京工業大学 名誉教授・相模中央化学研究所 理事



半世紀も前、卒業研究の成果を春季年会で発表することになり、本会へ入会した。口頭発表時の緊張と高揚感を今でも覚えている。大学院では、研究成果をまず創刊間もない速報誌へ投稿し、ついでそのフルペーパーを欧文誌へ投稿し、合計10編の論文の成果をあげて博士号を取得した。恩返しの意味を込めて欧文誌の編集に二度携わった。助手時代に欧文誌に発表した論文がウィスコンシン大学のS. E. Nelsen教授の目に留まり、合宿形式のラジカルイオンに関するゴードン会議に招待された。著名な研究者らが口角泡を飛ばしながら深夜まで議論し合うのを目の当たりにして、大いに刺激を受けた。偶然ルームメートとなった有機電気化学が専門のD. H. Evans教授（当時ウィスコンシン大学、後にデラウェア大学を経てパデュー大学）とは今でも親交が続いているし、デュポンの研究者と知り合いになり、ウィルミントンの研究所で講演を行う機会を得るなど貴重な経験をすることができた。学会で発表することは重要である。筆者も在職中には国内外の多数の学会や研究会へ所属し、発表や世話を行ってきた。日本の学会では、質問時間が短く、実質的な議論がしにくいのが、海外で発表すると核心を突いた質問があり、ときには研究を飛躍させるような助言をいただくことがある。学会に参加して発表を聞かずとも学術論文に目を通せば、済むではないかという意見もあるが、学会発表は学術のみならず人的・国際交流の場であり、先に述べたように生涯にわたる研究仲間を得る良い機会でもある。

昨年、藤田誠東大教授が「論文を書こう」という衝撃的な論説を本誌に寄稿されたが正鵠を射たものとして大いに賛同する。筆者も論文として学術雑誌に発表することはインパクトファクターに関係なく学会発表よりも遥かに多くの研究者や技術者への有要な情報源となるものと考えている。したがって、学会発表に多くの時間を割くよりは論文を執筆する方がより重用であることは言を待たない。発表しっぱなしで論文にしないことは税金の無駄遣いといわれても仕方がない。私大の教員でも私学助成金が血税から支弁されていることを忘れてはならない。論文を書かない大学教員に限って自分は教育に重きを置いているなどと弁解するが、これは体の良い言いわけに過ぎない。

近年、博士課程への進学率の低下や論文数の減少が危惧されている。筆者の学生時代は研究者への憧れもあって、裕福でない学生が博士課程へ進学する傾向が強かった。また、指導教官も具体的なテーマは与えず、キーワードを挙げるだけで、学位取得は自己責任で自由に研究をさせる傾向が強かった。テーマを自ら設定して研究を進められる創造性豊かな博士課程学生や与えられた課題に対して果敢に挑戦する逞しい修士課程学生など有為な人材を世に輩出するとともに、積極的に論文を書くことが大学教員の責務ではなからうか。

© 2020 The Chemical Society of Japan